

図書館の扉を開くと

進藤 郁子

学生時代、図書館には足繁く通った。中学生より師事した恩師、故林秀光先生はジュリアード音楽院で学ばれ、リサイタルのアンコールには必ず編曲物を演奏された。聞き慣れたフレーズが豪華絢爛に裝飾された、洒落たハーモニーに包まれる変容に、私は、すっかり魅了された。特にヨハン・シュトラウスの美しき青きドナウのシュルツ編曲は素晴らしかった。リサイタルで演奏を聴いたとたんに、楽譜が見たくなくなった。図書館に直行し、楽譜を探した。密かに練習してみたが、私の能力では埒が開かない。そこで、音源を聴いてみようと再度図書館に行き、往年の偉大なピアノストのロール盤を探して聴いた。そうすると、今度は、その演奏者の人と業績を知りたくなり、図書館で関連の書籍を探した。図書館は、私の好奇心を次々に満たしてくれた。

私は幼少よりピアノを始め、音高・音大と進んだが、一つの事を続けていると、必ず悩み迷い、立ち止まる時がある。私が、音楽を自分の道に選んでよいのかと立ち止まったのは、高校時代だった。そんな時に図書館で、小冊子「ハミング」の連載記事『コンサートピアノストへの道』に出会った。この連載記事は、後に一冊の本として出版されたが（ルーテンカッター、1982）、ジュリアード音楽院の学生がコンサートピアノストに成長してゆく道程の厳しさが描かれていた。学生の勉強の仕方、レッスンの様子、悩み、疑問は、まさしく当時の私の姿と重なり、進路に大きな示唆を与えてくれた。同書中のストラヴィンスキーの言葉、「我々の自由は厳しい自己訓練の後に生まれる。」

は、音高時代の私の心に大きく響いた。

音大を卒業後、私は、パリ国立高等音楽院に留学した。ドビュッシーのプレリュードのレッスンで、当時の恩師、故イヴォンヌ・ロリオ先生は「ここはスーラの点描画のタッチで弾いてみたら。」とか「ペレアスとメリザンドの第4幕のゴローの歌を思い浮かべてみて。」と、さりげなくおっしゃった。ドビュッシーを演奏するならば、絵画もオペラも知っているのが当然という前提で、レッスンは進んだ。題名は知っていても、深い内容が分からなかった私は、即座に図書館の薄暗いレコード視聴室で「ペレアスとメリザンド」を聴いた。図書館には、初見のクラスのジヨルジュ・プリューデルマシエル先生のレコードが所蔵されていた。レッスンの時に、先生の演奏に対する感想を述べると「あー、それは20歳の時の録音だ。僕はその時から聴衆に育てられた。」とさりととおっしゃった。私は、とうてい体得できない言葉が先生の口からこぼれ出た。また、別の時には、ラジオで流れていたラヴェルのスペイン狂詩曲（連弾）が、あまりにも魅力的で思わず聴き入った。それも、プリューデルマシエル先生の演奏だったため、スペインに行きたくなつたと申し上げると、先生は楽譜を取り出し全4曲を、詳しくアナリゼをしながら演奏して下さった。気が付くといつの間にか窓の外は暗くなり、3時間が経っていた。先生の音楽に対する情熱と、心から音楽を愛し楽しんでる姿勢に圧倒された。と、同時に自分の目で楽譜を読みたくなり、私は図書館へ直行した。図書館の扉を開けるとその先に、広大な世界が待っている。